概説

１．太陽病の部位

太陽病の及ぶ範囲を『傷寒論』太陽病篇の条文から考察すると，足の太陽膀胱経･足の太陽膀胱腑，それと太陽が主るところの肌表の営衛である。また「太陽は表を主る」一方で，同時にまた「肺は皮毛を主る」ので，太陽病で体表の陽気が邪を受けて，表気が機能失調に陥ると，しばしば肺気の宣発と粛降の機能も失調する結果，咳や喘が現れる。それゆえ『傷寒論』では，手の太陰肺の病証は「太陽病篇」に書かれており，「太陰病篇」には出てこない。

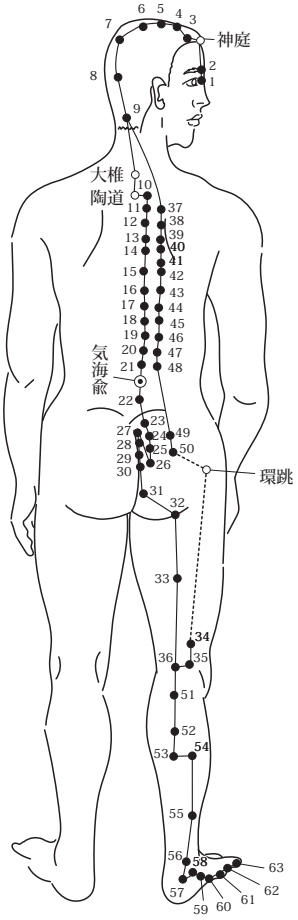
２．太陽病の成因

①風寒外邪の侵襲：これが太陽病の主要な病因である。

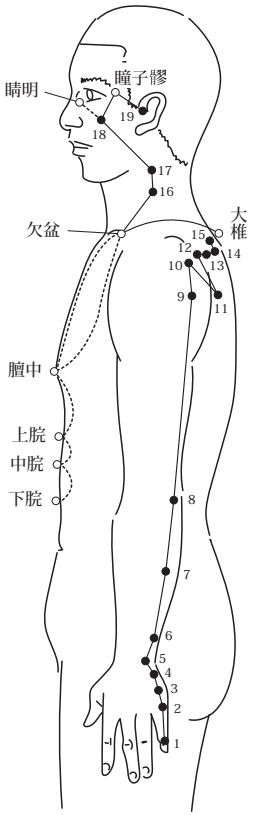
②少陰にあった邪が外の太陽に出る：もとは少陰寒盛証であったが陽気が回復してきて，陰にあった邪が陽の部位に出る，つまり臓にあった邪が腑に戻るので，邪気は外の太陽に出る。あるいは少陰熱化証で，正気が回復し，邪気は外の太陽に出る。ここで注意せねばならない点は，邪気が外に出るといってもそれは少陰〔腎〕から太陽膀胱腑に出るのであって，けっして少陰から「太陽の経」や「太陽の表」に出るのではない。

３．太陽の生理

「太」とは「大」の意味だ。「太陽」のもともとの意味するところは強大な陽気であり，それゆえ「巨陽」とも呼ばれる。『黄帝内経』では太陽の名を使って小腸経と小腸腑，および膀胱経と膀胱腑を命名している。すなわち，手の太陽小腸経と手の太陽小腸腑，足の太陽膀胱経と足の太陽膀胱腑である。しかし『傷寒論』で述べている太陽病とは，条文の内容から判断すれば，足の太陽膀



足の太陽膀胱経



手の太陽小腸経

胱経，足の太陽膀胱腑および体表の三者の陽気が風寒の邪気によって傷つけられて起こる病変である。つまり，外感病の初期段階では，手の太陽小腸経と手の太陽小腸腑に病変は起こらないということだが，これは実際の臨床症状を観察して得られた事実にもとづいている。

1 足の太陽膀胱経

足の太陽膀胱経は人体の頭・項・背を，頭から足に向かって走行する。循行する経路は最長，穴位は最多，カバーする面積が最大の経脈である。この経脈は上半身では項（うなじ）にある穴位の風府に連なり，また督脈と相通じることによって，太陽と督脈の連絡を橋渡しする。一方，下半身では腰にある腎に絡（らく）し，また膀胱に属するので，太陽と少陰の表裏関係を橋渡しする。督脈は諸陽を総督し，陽脈の海である。腎は元陰元陽を蔵し，一身の陰陽の本である。ゆえに太陽経は，督脈の陽気と腎中の陽気との援助を借りることによって，一身の表を主る。つまり，人体体表の陽気は，太陽によって主管されている。『素問』熱論に説く，「巨陽は，諸陽の属なり，その脈は風府に連なり，ゆえに諸陽のために気を主るなり」とは，まさにこの意味なのだ。足の太陽経の経別は膀胱に属し腎に絡し，心に散布している。この経別は膀胱と腎との表裏関係の連絡を強化するだけでなく，また膀胱と心の連絡を橋渡しする働きを持つ。まさにこの太陽の経別が心に散布していることにより，太陽蓄血証ではなぜ「狂」や「発狂」などの，「心は神志を主る」機能の失調による症状が出現するのかが説明できる。

2 足の太陽膀胱腑

膀胱は下焦に位置し，足の少陰腎とは臓腑相連の関係にあり，両経脈は相互に絡属し，両者は互いに表裏を為す。膀胱は津液を蔵し，また気化機能を管理している。膀胱の気化機能は二つの面に反映される。一つは陽気の化生と輸布で，膀胱は腎陽の温煦作用のもとで気化機能を通じて，陽気を化生する〔生み出す〕。形成された陽気は太陽膀胱経脈と三焦を経由して体表に輸布される。これが『霊枢・本臓篇』にいう「腎は三焦膀胱に合す。三焦膀胱とは，腠理毫毛は其の応なり」の意味である。もう一つは，水液代謝に関与することで，膀

胱の気化作用を通じて，①尿として水液を排出し，また②一部の水液を津液に化生し，津液を輸布上承させ，もって全身を潤沢にし，人体によって再利用される〔膀胱者，州都之官，津液蔵焉〕。このように「膀胱」とは一連の機能に関する概念であり，けっして尿液の貯留と排泄を行う，単純な解剖学的構造物を指すのではない。

3 太陽の陽気

太陽の陽気の量は，三陽のなかで最多かつ最大である。『黄帝内経』ではこれを三陽や巨陽と称している。太陽の陽気が分布する部位，あるいは別の言い方では，太陽の陽気が作用する部位は，主に体表である。体表部位における陽気の作用は三つある。①肌表の温煦〔温める〕，②汗孔の開闔（かいごう）〔開閉〕を管理して体温を調節，③外邪を防御。これら三つの機能がすなわち，「開闔を司り，腠理（そうり）を肥やし，外を衛（まも）りて固しと為す」の意味だ。『霊枢・営衛生会篇』の「太陽は外を主る」とは，太陽の陽気が外表を防衛する「衛外機能」をいったものなのだ。太陽の陽気は衛外機能を有するので，「衛気」とも呼ばれる。人体において体表は，外界との接触面積が最大だ。ゆえに太陽の陽気は必ず強勢でなければならない。もし体表の陽気が不足減弱すれば，肌表を温煦，外邪を防御，衛外して固める，などの諸機能も低下することになる。これが「太陽」「三陽」「巨陽」と呼ばれる所以である。

太陽の陽気の働きは，体表において衛外機能を発揮し，このゆえに「太陽は表を主る」といわれる。一方，体表の陽気が外来の風寒の邪気によって傷害されると，当然これは太陽病と呼ばれる。営は脈中を行（めぐ）り，衛は脈外を行る。営は衛の守りとなり，衛は営の使いとなる。営と衛は相互に支え合って離れることはなく，営と衛は共同して体表を温養濡潤し，また体表を保護する。太陽病とは外来の風寒邪気が体表の陽気〔太陽の陽気は体表に分布する。体表の陽気は衛外機能を持ち，脈中を行る営気と，脈外を行る衛気から成る〕を損傷した状態なので，当然ながら傷害は営気にまで及ぶ〔衛は脈外，営は脈中を行る〕。これゆえに，医家の間では「太陽は表を主り，また営衛を統（す）べる」といわれている。それで，太陽病には営衛の病証も含まれる。

太陽陽気の化生・補充・布達：

太陽の陽気は下焦において化生される：前に見たように，腎陽の温煦作用のもとで，膀胱は気化作用によって陽気を化生する。発生した陽気は膀胱経脈と三焦を通じて，体表に向けて輸布される。

太陽の陽気は中焦において補充される：太陽の陽気は体表において絶えず消費されているので，中焦脾胃が取り込んだ水穀精微の気でもって，常にエネルギーを補充する必要がある。俗にいう「腹中に食あれば身上温かく，腹中に食無ければ身上寒(ここ)ゆ」とはまさしく，「太陽は表を主る」機能に対する，この中焦脾胃のエネルギー・サポートを説明したものだ。

太陽の陽気は上焦において宣発される：太陽の陽気は膀胱から，足の太陽膀胱経脈と三焦を通って，体表に向かって輸布される。しかし体表に分布するには，上焦肺気の宣発作用の力を借りねばならない。

『黄帝内経』の「衛は下焦より出づ」「衛は中焦より出づ」「衛は上焦より出づ」という文句は，太陽の陽気は下焦で化生され，中焦で補充され，上焦で宣発されるというわれわれの認識と一致する。

以上から，「太陽は表を主る」という生理機能は，いくつもの臓腑が協同して働いてはじめて達成されることが理解されよう。このことは逆に，肌表が邪を受けて太陽陽気が風寒の邪によって傷害された場合，今度は「太陽は表を主る」に関与する諸臓器に機能失調が現れることも理解できるだろう。実際に，肺気不利になって喘咳が現れ，脾胃の気の昇降失調で食欲不振・嘔吐・下痢・便秘などはしばしば見られる。また平素から腎陽虚の人では，太陽部位が風寒の邪を感受すると，邪気はしばしば少陰に飛び移り，少陰病が出現する。

４．太陽病の証候分類と治法

学習の便宜のため，後世の医家は一般に「太陽病篇」の内容を，太陽病証・太陽病変証・太陽病類似証の三大類に分けている。この分類法は広く一般に受け入れられているわけではないが，『傷寒論』の初学者が条文を分類学習する際には役立つので，これからはこの分類法を採用する。

太　陽　病

（1）太陽病証

〈1〉太陽経証（＝太陽表証）

①太陽中風証：桂枝湯

②太陽傷寒証：麻黄湯

③表鬱軽証：桂枝麻黄各半湯・桂枝二麻黄一湯，桂枝二越婢一湯

〈2〉太陽腑証（＝太陽裏証）

①病在気分（太陽蓄水証）：五苓散

②病在血分（太陽蓄血証）：抵当湯あるいは抵当丸

（2）太陽病変証

（3）太陽病類似証

1 太陽病証

太陽病証とは，邪が太陽経あるいは太陽腑にある病証のことで，経証と腑証の二大類に分けられる。

太陽経証：またの名を太陽表証という。病変部位は主として経脈と体表である。本証はさらに三つに分けられる。

①太陽中風証：発熱，汗出，悪風，頭項強痛，脈浮緩などを主な症状とする。風邪が襲表し，「衛強営弱」〔後述。第2条，第95条〕の状態になる，営衛の調和の失調が基本病理である。治療は桂枝湯で解肌祛風し，また営衛を調和する。『傷寒論』ではさらに桂枝湯のその他の適応証，桂枝湯の禁忌証，および桂枝湯の加減応用について例示している。また，加減応用については，「太陽中風証＋兼証」のものと，雑病のものとを含んでいる。

②太陽傷寒証：悪寒発熱，無汗で喘す，全身疼痛，脈浮緊などを主な症状とする。寒邪の襲表によって，「衛閉営鬱」の状態となる，これが基本病理だ。治療は麻黄湯で発汗散寒，宣肺平喘する。『傷寒論』ではさらに，麻黄湯の禁忌証，麻黄湯の加減応用例もあげている。加減応用例のいくつかは太陽傷寒証の兼証である。

③表鬱軽証：発熱悪寒，これが瘧（ぎゃく）状に間歇的に発作し，瘙痒感，顔面紅潮などが主要症状だ。表証が遷延した状態である。表に小邪があって閉鬱し〔閉じ

込められ〕て解消せず，しかも営衛の気はすでに不足している，これが基本病理である。治療は，桂枝麻黄各半湯・桂枝二麻黄一湯で少し発汗する。一方，表に小邪があって解せず，しかも裏には軽い鬱熱があって煩躁する場合は，桂枝二越婢一湯で，少し発汗するとともに鬱熱を清ます。

その他さらに，「太陽病篇」には温病と風温などの温熱病の初期症状についても論述しているが，残念なことに具体的な治療法の記載はない。その理由を考えると，仲景の時代には温熱病に対する治療方法がまだ十分には蓄積されていなかった，あるいは当時は温熱病の症例が少なかったので法則を導き出せなかった，あるいは『傷寒雑病論』から温病証治に関する記載が遺失してしまった，などであろう。その結果，後世の医家たちには，温熱病と湿熱病の弁証論治に関してきわめて広い自由な研究余地が残されることになった。

太陽腑証：太陽病の裏証に属する。主な病変部位は太陽腑にある。二つに分類される。

①病が気分にある（病在気分）：太陽膀胱の気化機能が失調する結果，水邪が体内に蓄られる。一般に「太陽蓄水証」と呼ばれる病証だ。主要な臨床症状は，小便不利，渇して飲水を欲する，少腹が裏急して苦しいなどで，さらに表証を伴う。治療は五苓散で外疏内利し〔外邪を疏散し，内湿を利す〕，また表裏両解する。

②病が血分にある（病在血分）：表邪が経を循って裏に入って化熱し，熱は下焦において血と結合して血熱内蓄の状態になる。これは一般には「太陽蓄血証」と呼ばれる。主要症状は，狂の如し，あるいは発狂，少腹の急結あるいは硬満などだ。治療は桃核承気湯で泄熱化瘀または抵当湯（あるいは抵当丸）で破血逐瘀する。

2 太陽病変証

太陽病を失治（時機を得た治療ができない，最良の治療時機を逸する）したり，あるいは誤治（間違った治療を行う）した後，病状に新しい変化が現れることがある。新しく出現した病証が，六経病の特徴を具えていないので，六経でもって命名できない場合，後世の医家らはこのような病証を一括して「太陽病の『変証』」と呼んでいる。何度も誤治を繰り返してたどり着いた，病情の複雑な変

証のことを，『傷寒論』では「壊病」と呼んでいるが，その意味するところは，典型的な傷寒病が，誤治の反復で壊れてしまった，ということだ。

太陽病変証あるいは壊病は，寒あるいは熱証，虚あるいは実証，あるいは寒熱錯雑証，あるいは虚実挟兼証と，変化は多種多彩で，そこには一定の固定した規則性があるわけでない。仲景は「太陽病篇」の中で，熱鬱胸膈の虚煩証・邪熱壅肺の咳喘証・裏熱に表邪を兼挟した下利証・内臓陽虚証・陽虚兼水気証，および陰陽気血両虚証・邪気と痰水とが互結した結胸証・気機壅滞した昇降失調による心下痞証などの弁証論治を列挙している。錯雑した複雑な病証に対しては，すべからく「その脈・証を観て，何れの逆を犯したるかを知り，証に随ひ之を治せ」〔第 16 条〕の原則に従うことを指示している。この一句は，いま患者が現している脈象と症状とを詳しく観察し，これまで用いた治療手段のどこが間違っていたかを熟考し，しかるのちに具体的状況にもとづき適切な治療を行え，という意味なのだ。これはまさしく弁証論治の精神を具現している。「弁証論治」という言葉自体は『傷寒論』には見られないが，その精神を端的に表現したのが，ほかでもない『傷寒論』のこの一句なのだ。

3 太陽病類似証

太陽病類似証とは，あるいくつかの雑病がその経過中に，懸飲証や胸膈痰実証など，太陽病に類似した一連の症状を現すものをいう。これらを「太陽病篇」に入れて考察するのは，太陽病と相互鑑別するのが主要目的である。これについては『金匱要略』でも学ぶので，『傷寒論』では重点を置いての学習は控える。

5．太陽病の自然経過と予後

太陽病の自然経過は一般には六七日である。これは『傷寒論』の条文にいう「太陽病，頭痛七日以上に至り自ら愈ゆるものは，その経を行り尽くすを以ての故なり」にもとづく。ただし，もし適時に治療を始め，かつ治療法が的確なら，経過を短縮し，発汗解表によって早期に治癒させられるだろう。

第１節　太陽病弁証綱要

１．太陽病提綱

太陽之為病，脈浮，頭項強痛而悪寒。(1)	太陽の病たる①，脈浮，頭項強痛して悪寒す。(1)
【訳注】①「□□之為○」は「□□の○たる」と訓読し，古来からの読み癖である。	
【口語訳】およそ太陽経に病変が生ずれば，脈は浮となり，頭が痛み，項部がこわばって悪寒する。(1)	

【提要】太陽病の脈証の提要。

【講解】本証の成因　風寒の外襲。

主証と病機　脈浮*：外邪が表を襲うと，正気は邪に対抗するために外に向かって浮き上がってくるので，正気である気血は必然的に表の部位に旺盛となり且つ充満する。脈象は気血の活動を反映するから，脈は気血の活動を反映して浮となる。表を主る浮脈の特徴は，「軽取して得られ，重按して少力，浮取して有余，按取して不足，水に漂う木の如し」である〔原文:軽取即得，重按少力，挙之有余，按之不足，如水漂木〕。

頭項強痛：太陽経脈は前額部を上行し，頭頂部で交わり，内に入って脳に絡す。また別経路が出て項部を下行する。外邪が束表し，太陽経脈が邪を受けると，太陽経の経気が失調する。その結果，太陽経脈の循行部位に筋脈の拘急や肌肉の痙攣などの症状，つまり頭痛に伴って頸項部の緊張やこわばりが現れる。この症状は，邪気が太陽経脈上に存在することを示す「定位性」の症状である。

悪寒：風寒の邪が肌表を外から侵襲すると，衛陽が傷害されるので温煦作用が失調する。衛陽の正常機能である「分肉を温む」作用が失調すると，悪寒が現れる。条文の「悪寒」の前にある「而」の字は，接続詞で「また必ず」の

意味を持つ。この字を使う理由は，表証であると診断する場合の「悪寒」の重要性を強調するためだ。これ以降，後世の医学家の間で，「一分の悪寒があれば，一分の表証がある」といわれるようになった。

＊ 脈浮のように枠で囲んだ語句は，条文中に述べられていることばを示す。全篇この通り。

これら三証〔＝脈浮，頭項強痛，悪寒〕は，風寒の邪気が太陽経脈と肌表とを侵襲すると，正気が奮起して邪気と抗争するという病理機序を反映して現れたもので，太陽病表証の基本的特徴であり，「太陽病篇」の冒頭にあげられ，また後世の医学家たちからは太陽病提綱〔太陽病提綱証〕と呼ばれている。

太陽病では発熱が現れるはずだが，本条文には発熱が記されていない。その理由は，太陽病初期には発熱は悪寒より遅れて出現するからではないだろうか。例えば第３条に「或は已に発熱し，或は未だ発熱せず，必ず悪寒す」と述べて，発熱は悪寒と同時に出現するわけではないので省略され，提綱証条文には入れられていないのだろう。太陽表証の初期には発熱の出現が遅れることもあるにせよ，表証の現れる全過程でみれば，一般に悪寒と発熱は同時に存在することは覚えておかねばならない。これは，邪が太陽にあって，正気と邪気とが相抗争すると，衛陽は邪と争うために体表において亢奮するので，必然的に発熱が起こる。

このほか，脈浮は太陽表証だけに現れるのではない。脈浮は太陽表証以外に，例えば「風湿在表」「虚陽外浮」「正気外脱」「裏熱内盛」などでも現れる。頭項強痛も太陽表証だけでなく，裏にある水湿の邪が太陽経気を阻遏しても現れる。悪寒も太陽表証だけでなく，「裏陽虚衰」「表陽不足」「温煦失調」などでも現れる。重要なことは，上記の三症状が同時に存在してはじめて太陽表証と診断できるということだ。

条文末尾に付けた「(1)」のようなカッコ付きの数字は，趙開美が復刻した『仲景全書・翻刻宋板傷寒論』の条文に，条文の配列順に，現代の人が付けた番号である。「弁太陽病脈証并治上第五」から「弁陰陽易差後労復病脈証并治第十四」まで，全部で 398 条ある。

２．太陽病分類の提綱

1 太陽中風提綱

太陽病，発熱，汗出，悪風，脈緩者，名為中風。(2)	太陽病，発熱，汗出で，悪風し，脈緩①なる者は，名づけて中風②と為す。(2)
【注釈】①脈緩：緊脈の反対語。脈に緊張がない，ユルい，柔軟であることを意味する。正常人に見られる一息に四回で落ち着いて〔原文：従容〕ゆったりした〔原文：和緩〕「緩脈」を指すのではない。「太陽病」の三文字の後に「脈緩」とあるから，「脈浮緩」と考えるべきだ。 ②中風：肌表が風邪によって傷害されて起こる証候を指す。突然にフラッとして倒れ，半身麻痺と口眼歪斜が現れる，後世にいう「中風」とは異なる概念のもの。	
【口語訳】太陽病にかかって，発熱があり，汗が出て，風に当たると寒気がし，そして脈が緩であるものを，中風と呼ぶ。(2)	

【提要】太陽中風証の脈証の提綱。

【講解】本証の成因　風邪の襲表。

主証と病機　発熱：太陽中風とは，風陽の邪気が肌表を侵襲して起こる病証である。風陽は衛陽を傷害し，両陽は相争う。衛陽は邪と争うために浮かび上がって外に旺盛〔原文：浮盛〕となり，そして病理的に亢奮するので発熱が現れる。衛陽の病理的亢奮，および衛陽の外への浮盛の状態，さらに衛分には邪気もまた盛んなので，第 95 条ではこの病機を「衛強」と表現している。

汗出づ：一つは，風邪によって衛陽が傷害されて，衛外が固まらなくなる。別の側面として，「風の性は疏泄す」るので，営陰*を外越せしめる結果，自汗が出る。汗が出ると必然的に傷営が起こり，営陰不足を招くので，第 95 条ではこの病機を「営弱」と称している。このように風邪が襲表し，衛強営弱となり，営衛の調和が失われている状態が，太陽中風証の基本病機である。

＊衛陽との対比で営陰としている。

悪風：一つには，衛陽が傷害されて温煦作用が失われる。もう一つには，汗

が出て肌腠がゆるくスカスカになって，風邪の侵襲に抵抗できず，それゆえに悪風する。悪風と悪寒はどちらも寒気を自覚するのだが，風に当たると気持ち悪く，風に当たらなければ軽快するのが悪風。風のない密室にいて，厚着しても寒気が軽快しないのが悪寒である。ただし『傷寒論』において，悪寒と悪風の使い分けはそれほど厳格ではなく，しばしば混用されている。

脈緩：「太陽病」の前提のもとに「脈緩」とあれば，脈は「浮緩」と理解すべきだ。浮は邪が表にあり，緩は営陰が傷害されていることを示す。

およそこの脈証を呈する場合は太陽中風証であり，風邪が襲表し，衛強営弱で営衛の調和が失われた病機を反映している。後世の医学家はこれを太陽中風証の提綱と呼んでいる。

太陽中風証の脈証のなかでも，「汗出づ」と「脈浮緩」〔条文は「脈緩」〕が最も重要だ。なぜなら両者によって，太陽中風証の営衛不和で衛強営弱という病機が提示されるばかりでなく，同時に無汗で脈浮緊の太陽傷寒証とも区別されるからだ。太陽中風証は「汗出づ」と「脈緩」を特徴とするので，後世には「中風表虚証」と呼ばれるようになった。ここで注意すべきは「表虚」と名づけられてはいるが，真の意味の虚証ではない。無汗で脈浮緊の傷寒表実証と比べると相対的に虚証だというにすぎない。

2 太陽傷寒提綱

太陽病，或已発熱，或未発熱，必悪寒，体痛，嘔逆，脈陰陽俱緊者，名為傷寒。(3)	太陽病，或は已に発熱し，或は未だ発熱せず，必ず悪寒し，体痛み，嘔逆(おうぎゃく)し，脈陰陽俱(とも)に緊[①]なる者は，名づけて傷寒[②]と為す。(3)
【注釈】①脈陰陽俱に緊：陰陽とは，ここではそれぞれ尺脈と寸脈を指していったもの。脈が陰陽俱に緊とは，寸関尺の三部の脈がすべて緊象を呈することをいう。本条文の冒頭に太陽病といっており，脈は浮であるはずだ。ゆえにその脈は寸関尺の三部はすべて浮緊ということになる。 ②傷寒：証候名。外感の風寒で，邪を感受して即発する表証で，これは狭義の傷寒である。	

【口語訳】太陽病にかかり，あるいはもうすでに発熱しており，あるいはまだ発熱はしていないが，必発の証候として，悪寒・身体の痛み・悪心嘔吐があり，脈は寸関尺の三部すべてに緊象がみられるものを，傷寒と呼ぶ。(3)

【提要】太陽傷寒証の脈証の提綱である。

【講解】本証の成因　風寒の邪の襲表。

主証と病機　必ず悪寒す：必ず悪寒が先行し，しかもその程度が比較的強いことを強調している。太陽傷寒とは風寒の邪が人体の肌表を侵襲して現れる証候である。寒は陰邪と為し，人体の陽気を最も傷害しやすい。寒邪が襲表すると，衛陽は傷つき，温煦作用は失調し，ゆえに必ず悪寒が生じる。

或は已に発熱し，或は未だ発熱せず：ある人が已に発熱しているのは，風寒が襲表すると，衛陽は時を待たずに表に達しそこで邪と抗争を始めるので，発熱は比較的早期に現れる。ある人がまだ発熱していないのは，感受した風寒の邪が比較的重いと衛陽は鬱滞阻遏され，あるいは体質虚弱があると適時に表に達することができず，どちらの場合も邪との抗争が始まらず，ゆえに発熱は比較的遅くまで出現しない。しかし，早晩すべての場合で発熱する。すなわち，太陽傷寒証の発熱の出現は，早いこともあれば遅いこともあるが，最終的には必ず現れるということだ。もし発熱が現れないならば，それは太陽傷寒ではなく，少陰の傷寒に属するものだ。

体痛：全身性の疼痛で，傷寒の主要症状の一つである。寒の性は凝渋で，寒は収引を主り，寒は痛みを主る。寒邪が肌表を傷害すると，外では衛陽を閉じ込めるのみならず，内では営陰を鬱滞させるので，営衛気血は凝滞し，筋脈は拘攣し，その結果，全身の疼痛が出現する。

嘔逆：寒邪が束表すると，正気は抗邪のため表に集中するので，裏の保守・制御が手薄になる。すると裏気〔＝腑気〕は制御を失い，昇降失調するから嘔逆が起こる。裏気の昇降失調は表証にしばしば付随して出現する兼証だが，嘔逆として現れたり，あるいは食欲不振，あるいは下利，あるいは便秘として現れる。

脈陰陽倶に緊：すなわち寸関尺の三部の脈すべてに浮緊の象が現れることだ。浮は邪が表にあることを主り，緊は寒邪の亢盛を主る。陰陽倶に緊の脈は「寒主収引」によって筋脈が拘攣して起こる。

以上の諸証は，風寒の邪の襲表によって衛閉営鬱となった，太陽傷寒証の病機を反映している。衛閉営鬱では必然的に汗は出ないが，これもやはり太陽傷寒証の主要な特徴の一つだ。無汗と脈緊を特徴とするので，後世の医学家は太陽傷寒を風寒表実証と呼ぶようになった。

太陽中風と太陽傷寒の両者は，二種類の異なるタイプの太陽表証である。太陽中風とは，風邪の襲表により，衛強営弱で，営衛が不調和となった状態だ。その症状は，発熱・発汗・悪風・脈浮緩を主症とし，太陽病表虚証に属する。一方，太陽傷寒は風寒の邪によって表が閉ざされた〔原文：寒邪閉表〕，衛閉営鬱の状態だ。悪寒・発熱・無汗・身痛・脈浮緊を主症とし，太陽表実証に属する。両者を鑑別するキーポイントは，有汗か無汗かにある。

3 温病と風温提綱

太陽病，発熱而渇，不悪寒者，為温病。若発汗已，身灼熱者，名風温。風温為病，脈陰陽俱浮，自汗出，身重，多眠睡，鼻息必鼾，語言難出。若被下者，小便不利，直視失溲。若火者，微発黄色，劇則如驚癎，時瘛瘲。若火薫之，一逆尚引日，再逆促命期。(6)	太陽病，発熱して渇し，悪寒せざる者は，温病①と為す。若し発汗し已はり，身灼熱する者は，風温②と名づく。風温の病たる，脈陰陽倶に浮に③，自汗出で，身重く，多く眠睡し④，鼻息必ず鼾し，語言出で難し。若し下さるる者は，小便利せず，直視失溲す⑤。若し火さるる⑥者は，微かなれば黄色を発し，劇しければ則ち驚癎⑦の如く，時に瘛瘲⑧す。若し之を火薫し⑨，一逆すれば尚ほ日を引き，再逆す⑩れば命期を促す。(6)
【注釈】①温病：外感熱病のなかで温熱性質を有する一群の病証。前述の中風や傷寒と同じく，広義の傷寒に属する。 ②風温：一般の認識では，温病に誤って辛温発汗を用いて引き起こした一種の変証を指す。ただし『傷寒例』には，「風温」は，傷寒・温病・暑病・瘟疫・温瘧・温毒・冬温などの病名と一緒にあがっているので，ここの「風温」も独立した一つの病証名とも考えられる。本条文には引き続いて「風温の病た	

る」との記載があり，やはり「風温」を独立した病証とみなしてもよさそうだ。しかしながら「風温」は，温病を誤治した後に起こった変証であろうと，独立した病証であろうと，いずれにしても後世の中医学でいう温病のなかの「風温病」とは別物であることに注意すべきだ。

③脈陰陽倶に浮：寸関尺三部の脈がどれも浮盛で有力なことをいう。熱邪によって気血の活動が鼓舞され，気は盛んに血は涌き，血脈が拡張して流れが奔走するので，このようになる。

④多く眠睡す：熱盛で心神が擾乱されて昏睡状態となっている。

⑤失溲：小便失禁。「溲」の字単独では小便を指すだけだが，「後溲」とか「大溲」と記せば大便の意味になる。ここでいう小便失禁は，熱盛神昏により膀胱の約束が失調して起こる。直前の「小便利せず」――すなわち尿量減少のことで，熱盛傷津によって起こる――と何ら矛盾しない。

⑥被火：誤って火針・火薫・火熨・火灸などで治療されること。

⑦驚癇：驚は驚風，癇は癲癇のことで，どちらも抽搐を主症とする病証。

⑧瘛瘲：瘛，音は chì，四肢が引きつること。瘲，音は zòng，四肢が緩んで伸びること。瘛瘲とは四肢が時に屈曲，時に伸展することで，つまり抽搐のこと。

⑨若し之を火薫すれば：もし〔もう一度〕誤って火薫療法を行えば。

⑩逆：『広雅』巻三に曰く，逆とは乱なり，と。「乱」とは「錯」「誤」の意味であり，ここでは誤った治療，すなわち誤治を指している。

【口語訳】太陽病にかかり，発熱と口渇があるが，悪寒しないものは，温病である。もしすでに発汗法を受けたのに，身体が灼けるように熱いなら，これを風温と呼ぶ。風温の証候は，寸関尺三部の脈がすべて浮で，自汗が出て，身体が重だるく感じ，嗜眠して，呼吸にはいびきを伴い，言葉が喋りにくい。もし誤って攻下法を施すと，小便不利となり，あるいは両眼が直視して尿失禁する。また誤って火療法を行うと，軽い場合は〔「微発黄色」の「微」を後の「劇」と対比させている。つまり「微則発黄色，劇則如驚癇」の意味に解釈している〕皮膚が黄色になり，重い場合は驚癇のような手足の抽搐など，各種の変証が出現する。もしさらに火薫法を行うなら，一再ならず過ちを犯すことになり治癒が遅れるが，そのうえさらに誤治を施すと患者の死亡を促すことになる。(6)

【提要】太陽温病と風温の脈証提綱，および誤治の後に起こる変証を述べている。

【講解】本証の成因　温熱邪気の外襲。

①温病の主症と病機　発熱：温熱の邪気が肺衛を侵襲すると，肺衛は温熱と相争うことで病理的な亢奮状態となり，ゆえに発熱する。

渇：温は陽邪で，津液を最も傷害しやすい。ゆえに温熱の邪気が人を侵襲した場合，伝経して裏証にならずとも，初期から津液の受傷による口渇が出現する。ところが傷寒証の場合は，初期には口渇はなく，邪気が裏に入って化熱し，そこで傷津が起こってはじめて口渇が現れる。

悪寒せず：寒邪が侵襲すると，陽気を傷害して温煦作用を低下させ，悪寒が現れる。一方，温熱邪気の場合は陰液損傷が主なので，悪寒は起こらない。温病の証候はバリエーションが多彩だが，「発熱して渇し，悪寒せず」が基本的な特徴だ。これが，中風・傷寒と温病との臨床的鑑別点であると明示している。

このほか，「風は百病の長と為す」といわれるように，温熱邪気が人を侵襲する場合はしばしば風邪を挟雑している。実際の臨床では，温病初期で邪が衛分を侵襲した時期には，軽微で短時間の悪風寒が現れる。温病初期の悪風寒は風邪によって衛陽が傷害され，衛陽の温煦作用が失調して起こる。しかしこの場合の悪風寒は，程度が比較的軽くて持続も短く，また口渇・舌紅・脈数などの熱象を伴うので，傷寒や中風と区別するのは困難ではない。

②風温の主症ならびに病機　発汗し已はり，身灼熱する者：発汗し終わってからも身体が灼熱しているのは，邪熱が猛(たけ)り狂っているからだ。邪熱熾盛(しせい)の状態に，誤って辛温発汗剤を使用すると，熱は助長されるので，熱は下がるどころかかえって悪化して身体は灼熱する。もしここの「風温」を一つの独立した病証とみるならば，この文章は「高熱で発汗していても熱が下がらないのもは風温の病である」と理解される。邪熱熾盛のゆえに高熱が現れ，熱邪が津液に迫って外越させるので汗が出るのだ。

脈陰陽倶に浮：内外ともに邪熱が充満しており，気血を鼓動し，気血は盛んに涌きあがり，脈は拡張して血が奔流するので，寸関尺三部の脈はすべて浮数の象を現す。ところで『傷寒論』中では，浮脈は熱を主る場合が多い。熱を主る浮脈は，軽取して直ちに得られ，重按して滑数有力を特徴とする。これは表を主る浮脈が，軽取して直ちに得られ，重按して少力なのと異なる。自汗は

陽熱が津液に迫って外泄させた結果である。

身重く，転側し難し：壮火〔盛んな火〕は気を食し，火熱は気を消耗させるので，倦怠して身体が重く感じる。また熱邪が経脈に壅滞し，経脈の気の流れが悪くなることも，身重くて転側し難くする原因となる。

多く眠睡し，鼻息必ず鼾し，語言出で難し：熱邪で心神が擾乱されるので起こる。患者は疲れきって嗜眠状態になること。心は「言」を主る。心神が擾乱され，熱盛では神昏となり，ゆえに発語〔＝言〕は困難になる。熱は気機を滞らせるので，肺窾が不利になれば，呼吸は必ず鼾する。

③風温を誤治して起こった変証の症状と病機　小便不利：ここでは小便の減少を意味する。熱盛傷津に加え，誤って瀉下法も使用し，陰液をさらに傷害してしまった。化源が不足しているので尿はつくられず，ゆえに小便短少となる。

直視：温熱の邪気はもともと陰液を損耗しやすいのに，加えて誤下によってさらに陰液を損傷し，ひいては肝腎の陰精をも損傷した。肝腎の陰精が虧虚すると，昇って目を栄養できず，それで両眼はボーッと凝視したままで無神となる。

失溲：小便失禁のこと。熱盛による神昏で，関門不固となり，膀胱の約束機能が失調し失禁が起こる。小便失禁と小便不利〔ここでは，尿量減少〕とは何ら矛盾せず，同時に存在しても不思議ではない。

発黄：風温に誤って火療法を用い，熱に熱を注ぐ結果となった。火熱が体内で営血を傷害すると，営気は輸布されないので身体が黄染する〔この病機については，陽明病の発黄証を参照のこと〕。

驚癇の如く，時に瘛瘲す：火邪の内攻により，あるいは熱極動風して，あるいは火熱で津液が虧損消耗し，水不涵〔hán〕木で動風〔五行の水→木，水不足で肝木が養われず，木が暴れて風を生じる〕し，まるで驚風あるいは癲癇のように，間歇的に抽搐が現れる。

若し之を火薫すれば，一逆すれば尚日を引き，再逆すれば命期を促す：もしさらに火薫療法を行えば，一回の誤治であり，患者の生命はまだ何日か持ちこたえられるが，誤治を再三再四と繰り返すと，患者の生命を短縮するばかりで，死期を早めてしまうことになる。

中風・傷寒・温病・風温はすべて外邪によって引き起こされる疾病で，いずれにも発熱が現れる。それらを分類すれば，発熱・汗出づ・悪風・脈浮緩は中

風，悪寒・発熱・身痛・無汗・脈浮緊は傷寒，発熱して渇し・悪寒せざるものは温病，高熱・汗出づるも熱不退のものは風温である。

中風・傷寒・温病・風温の証

	証
中風	発熱・汗出づ・悪風・脈浮緩
傷寒	悪寒・発熱・身痛・無汗・脈浮緊
温病	発熱して渇し・悪寒せず
風温	高熱・汗出づるも熱不退

注：上記の「温病」「風温」は『傷寒論』に記載のものであり，後世のそれらとは異なる。

本条文にあげた温病・風温および風温誤治後の臨床症状から，温熱の邪気が人を傷害すると，傷津・耗液・擾神（じょうしん）・動風・発黄などが出現することを提示している。後世の医学家たちはこの条文に啓発され，温邪の種類の違いや，その侵犯部位の違いに注意を払って，温病の発生と進展変化を深く研究を進めた。その結果，衛気営血弁証や三焦弁証という弁証論治の体系を基礎とする温病学説が次第に出来上がったのだ。温病学説とはまさに傷寒学術の継承と発展，補充と新規創出であるといってよいだろう。

3．太陽病および六経病の自然治癒日について

〔太陽病の自（おのづか）ら愈ゆる日と解せんと欲する時，および六経病の解せんと欲する時〕

病有発熱悪寒者，発於陽也。無熱悪寒者，発於陰也。発於陽，七日愈。発於陰，六日愈。以陽数七，陰数六故也。(7)	病に発熱して悪寒する者有り，陽に発するなり。熱無く悪寒する者は，陰に発するなり。陽に発するは，七日（しちじつ）にして愈ゆ。陰に発するは，六日（ろくじつ）にして愈ゆ。陽の数は七，陰の数は六を以ての故なり。(7)

【口語訳】およそ発熱と悪寒が出現するのは，陽に発した疾病〔＝中風〕である。そして発熱せずにただ悪寒しかないものは，陰に発した疾病〔＝傷寒〕である。陽に発した疾病は，七日で治癒する。陰に発した疾病は，六日で治癒する。なぜなら陽数は七で，陰数は六であるからだ。(7)

【提要】「陽」に発した病と，「陰」に発した病との鑑別，および外感病の自然経過について述べている。

参考　病に発熱して悪寒する者有り，陽に発するなり。熱無く悪寒する者は，陰に発するなり。(7)

この条文の「陽」と「陰」は何を指すかについて，古来より議論されている。大きく分けると以下の三種類になる。〔郝先生の見解は以下の③である〕

①「陽」とは三陽（太陽，陽明，少陽），陽証のこと。「陰」とは三陰証，陰証のこと。こう解釈すると，本条文は陽証と陰証を鑑別する高位の条文となる。

②「陽」とは太陽，「陰」とは少陰のこと。しかし少陰病は，畏寒蹉趺（いかんけんが），手足逆冷，下利清穀，脈微欲絶，但欲寐など，陽気虚衰にもとづく場合が多く，自然治癒は困難。まして１週間で治癒することはないだろう。

③「陽」とは太陽中風証。風は陽邪と為す。太陽中風証は風陽の邪が衛陽を傷害して起こる。発熱悪寒は太陽中風の初期症状である。「陰」とは太陽傷寒証のこと。第３条に曰く，「太陽病，或は已に発熱し，或は未だ発熱せず，必ず悪寒し，体痛し，……名づけて傷寒と為す」と。第３条では傷寒は「無熱悪寒」と述べている。よって，７条の「無熱悪寒者，発於陰也」とは，傷寒のことを述べたものである。

以上，ビデオ教材での説明。

【講解】　発熱悪寒する者は，陽に発するなり：外邪が人体を侵襲すると，正気は奮起して邪気と抗争するので，発熱が現れる。発熱が起こるということは，正気は衰えておらず，邪気もまた盛んで，正邪の闘争が激しいことを表し，ゆえにこれは陽経に起こる証であり，陽証であることが多い。例えば，太陽病では発熱悪寒。少陽病では往来寒熱，あるいは嘔して発熱。陽明病では熱結して裏にあり表裏倶に熱す，あるいは蒸蒸発熱，あるいは日晡（じっぽ）潮熱などが現れる。

熱無く悪寒する者は，陰に発するなり：病邪が人体を侵襲したとき，陽気

がすでに虚し陰寒が独盛〔単独亢盛〕となった状態では，正気は邪気と抗争することはできないので，発熱は起こらない。発熱が現れないということは，正気はすでに衰弱し，抗邪能力が低下していることを表す。多くは陰経の証である。例えば，太陰脾陽虚弱・少陰心腎陽虚・厥陰虚寒で起こる厥など，どれも発熱せずに悪寒し，甚だしければ厥冷して脈微となる。

『素問・陰陽応象大論』に曰く，「陽盛んなれば則ち身熱し」「陰盛んなれば則ち身寒ゆ」と。『傷寒論』は『内経』の理論を継承し，悪寒発熱をもって陰証陽証弁別のキーポイントに設定した。この方法には特徴性と概括性とがあるので，本条文を外感熱病弁証の総綱だと考える医家は多く，また『金匱玉函経』では本条文を六経病篇の冒頭に置いている。

ただし本条文後半の「七日にして愈ゆ」「六日にして愈ゆ」とに関連づけて考えると，陽証が七日で自然治癒することはあり得るが，陰証が六日で自然治癒することはほとんどあり得ない。それゆえ本条文の解釈に関して，後世の医学家らは上述の観点〔＝外感熱病の総綱〕以外に，いくつかの有益な参考意見を提起している。一つは張隠庵らを代表とするもので，「陽に発す」とは太陽に発すること，「陰に発す」とは少陰に発する，との説である。しかしこれでは「陰に発するは，六日にして愈ゆ」ることを説明することはできない。なぜなら，少陰病が六日で自然治癒するのは困難だと考えられるからだ。もう一つは方有執らを代表とする，風が衛を傷つけたものが「陽に発す」で，寒が営を傷つけたものが「陰に発す」だと考える説である。つまり，「陽に発す」るのは太陽中風のことで，「陰に発す」るのは太陽傷寒のことだという。この説で条文全体を解釈すると，発病してすぐに発熱と悪風寒とが現れるのは，風陽の邪が人を傷害した太陽中風で，発病して先に悪風寒のみが現れ，その後に発熱が現れるのが，陰寒の邪気が人を傷害して起こる太陽傷寒なのだ。

陽に発するは，七日にして愈え，陰に発するは，六日にして愈ゆ：一般的にいえば，太陽傷寒も中風も，合併症や併発病さえなければ，六七日経てば自然に治癒することは可能である。つまり，中風であれ傷寒であれ，太陽病という病の自然経過は六七日前後ということだ。

ここに提起されている「六，七日にして自ら愈ゆ」という問題について，これは多数の臨床例を通じて得られた結論であり，外感病の経過は「七日リズム」，つまり週リズムだと述べている。ヒトの生理と病理には，昼夜リズム・週リズ

ム・月リズム・四季リズム・年リズムなどが存在することを，早くも『黄帝内経』や『傷寒論』およびその他の医籍に記載されている。これらの記載は根も葉もないデタラメではなく，多数の臨床例を観察して得られた「確率」と考えるべきだ。まして多くの内容はすでに現代科学で実証され，時間生理学・時間病理学・時間薬理学といった新しい学説や学問領域が形成されている。人および生物が持つこの時間リズムは，おそらく太陽，月や星の周期運動に関連して形成されたのであろう。外感病の「七日リズム」について，以下に詳述する。

陽数七，陰数六：唐代の孔穎達は『尚書正義』を解説して，「天一生水，地二生火，天三生木，地四生金，天五生土，此れ其の生数なり。此くの如くなれば則ち陽に匹〔pǐ，対の片方〕無く，陰に偶〔ǒu，対〕無し。故に地六成水，天七成火，地八成木，天九成金，地十成土，是に于て陰陽は各匹偶を有し，而して物は成り得。故に之を成数と謂ふ」と述べている。

天地の成数

天	一	三	五	**七**	九
	生	生	生	**成**	**成**
	水	木	土	火	金
地	二	四	**六**	八	十
	生	生	**成**	**成**	**成**
	火	金	水	木	土

これから理解されるように，七は火の成数で，火を代表し，六は水の成数で，水を代表する。

> 道生一，一生二，二生三，三生万物。（『老子』）
> 天一，地二；天三，地四；天五，地六；天七，地八；天九，地十。（『周易』）
> 天一生水，地二生火，天三生木，地四生金，地六成水，天七成火，地八成木，天九成金，天五生土。（『尚書大伝・五行伝』）

『黄帝内経』によれば，「水火は，陰陽の征兆〔zhēng zhào，兆候〕なり」である。これにもとづけば，火は陽に属するから，ゆえに「陽数七」で，水は陰に属し，ゆえに「陰数六」といえる。